日本大学 桜樹会会報

第 10 号

昭和49年2月

日 本 大 学 桜 樹 会

目　次

競技会成績 …… 2

男子インカレに初優勝 …… 3

インカレ優勝メンバー …… 4

男子インカレ初優勝に思う　遠藤　幸雄 …… 4

男子初優勝に寄せて　稲橋　恒行 …… 5

インカレ優勝によせて　梶山　広司 …… 6

インカレの感想　寺元　良人 …… 6

インカレ出場に際しての感想　錦井　利臣 …… 7

インカレ　西巻　洋一 …… 7

インカレを顧みて　川野　耕二 …… 7

インカレに参加して　野原　秀安 …… 8

インカレ観戦のときの感想　一年生一同 …… 8

恒例国体懇親会 …… 11

第9回女子欧州選手権をみて　今村　悟 …… 12

行事 …… 15

会費領収について …… 18

お知らせ …… 20

編集後記 …… 20

競　技　会　成　績

東日本インカレ　（米沢市）

男子団体総合　第2位　277.05

個人総合　第2位　梶山広司　56.25

第6位　錦井利臣　55.20

種目別

鞍　馬　第1位　梶山広司

つり輪　第1位　梶山広司

鉄　棒　第1位　西巻洋一

女子団体総合　第3位　169.85

個人総合　第1位　矢部信恵　35.90

NHK杯　（横浜市）

男子個人総合　第5位　梶山広司

全日本インカレ

男子団体総合　第1位　548.30

（第2位　日体大　544.05）

個人総合　第1位　梶山広司　111.45

第2位　錦井利臣　110.25

第3位　寺元良人　109.55

種目別

ゆ　か　第2位　錦　井

第6位　梶　山

鞍　馬　第6位　寺　元

つり輪　第1位　梶　山

つり輪　第3位　寺　元

第4位　錦　井

跳　馬　第3位　梶　山

平行棒　第1位　梶　山

第2位　錦　井

鉄　棒　第2位　梶　山

女子個人総合　第3位　矢部信恵　73.50

種目別

跳　馬　第3位　矢　部

平行棒　第1位　矢　部

第5位　宮　本　敏　子

ゆ　か　第6位　林　田　房　美

全日本選手権　（札幌市）

男子団体総合　第2位　531.475

個人総合　第8位　梶山広司　108.725

第12位　錦井利臣　107.375

種目別

ゆ　か　第3位　錦井　18.625

第6位　梶山　17.925

鞍　馬　第2位　梶山　18.275

跳　馬　第5位　錦井　17.5625

平行棒　第3位　梶山　18.175

女子団体総合　第2位　353.70

個人総合　第5位　林田房美　72.35

	第6位	矢部信恵	72.30
	第10位	宮本敏子	72.00
種目別			
跳　馬	第3位	宮　本	18.125
平行棒	第5位	宮　本	18.575
	第6位	林　田	18.475

関東新人戦　（駒　沢）

男子団体総合	第2位		268.65
個人総合	第3位	千田修平	54.95
種目別			
ゆ　か	第4位	石毛　英二	9.25
鞍　馬	第5位	松田　　洋	9.05
つり輪	第2位	千田　修平	9.45
	第3位	神田孝一郎	9.35
	第6位	千葉　　勉	9.20
跳　馬	第2位	千田　修平	9.25
	第2位	千葉　　勉	9.25
平行棒	第4位	千田　修平	9.30
鉄　棒	第3位	千田　修平	9.35
	第4位	宇都木元美	9.30
	第5位	平良　　洋	9.25

男子インカレに初優勝

昭和31年春、旧体育館の片隅で産声を上げたわが日大体操部は、苦節17年、ついに学生体操界の頂上に登りつめた。

7月21日、会場の駒沢体育館は男子団体総合の大詰めを迎えていた。

日大、日体大の選手が演技を終えるたび、応援席は湧きに湧いた。そして日大の最終演技者が着地した時、勝利は確定した。ついに日体大を破って学生体操界の王座についたのである。

整列した選手に、応援席からテープがとび紙吹雪が舞った。ちょうど一昨年の、所も同じこの駒沢体育館での光景が思い出される。

あれはまぼろしだった。計算違いにも気付かず狂気乱舞した日大の応援席は、それほど優勝を待ち望んでいたともいえる。

あれから福井のインカレを経て、今回紛れもなく優勝を成し遂げたのである。選手の精進はもとより、関係諸先生方、先輩各位、それに100名を越す部員全員が一丸となって努力した賜ものであろう。

以下、それぞれの立場から、インカレ優勝に対する感想を収録した。

この中で、特に1年生部員の新鮮な感激は貴重であろう。今日大は追われる立場に立ったのであるから、今後現在の地位を保ち続けるためには、次代を担う若手の努力に期待がかかる。インカレで味った感激を、自分達の手で再現させてほしいものである。

インカレ優勝メンバー（男子）

① 出身県
② 出身高校
③ 学年

川野　耕二	西巻　洋一	錦井　利臣	野原　秀安
① 大分県	① 群馬県	① 熊本県	① 沖縄県
② 佐伯鶴城高	② 高崎工業高	② 鎮西高	② 興南高
③ 体育学科３年	③ 体育学科３年	③ 体育学科３年	③ 体育学科３年

寺元　良人	梶山　広司
① 岡山県	① 神奈川県
② 清風高	② 相模工業大学付属高
③ 体育学科３年	③ 体育学科２年

男子インカレ初優勝に思う

監督　遠藤幸雄

体操部創立１６周年目にして悲願の優勝を獲得したわけですが、決定瞬間の館内の興奮がいまもって伝わってきます。

考えてみると実に長い悲願の道であり、過去においていく度か緊迫した勝負を挑みながら涙をのんできました。

現副部長の門脇先生の熱意によって創立をみた体操部の初期には、いろいろなエピソードもあったようで、当時の状況を考えると現体操部の盛況はとても想像できなかったことです。

優勝決定のあと、しばし観覧席にて想い出されたのは、文理学部のいま車庫にあたる所につり輪と鉄棒があり、砂場をマット代りにトレーニングしたことです。堅くなっては砂を掘り、真夏には鉄棒が太陽に灼けないよう雑布で覆うことは、当時の下級生にとっての日課だったと思います。

その点、時間さえ許されるなら常時トレーニングのできる環境に恵まれた現在の学生は、まことに幸せといって過言ではありません。

日本の体操界が多くの諸先輩の必死の努力を土台に、今日あることは疑う余地がありませんが、日本大学もまったく同じ過程をたどってきたといえます。

〝稽古〟ということばのもつ意味は、古いことを思う、あるいは考えることだといいます。即ち、初心を忘れるなということに通じるもので、部としては、諸先輩のご苦労を無にしないよう学生の今後の指導にあたりたいと考えています。

大学体操界の王座に立った体操部には、これからよりきびしさが要求されるでしょうが、それをしっかりと受けとめていく決意です。なぜなら、学生スポーツにおいて生まれる、喜ぶ者、悲しむ者の純粋な姿に心うたれるものを見い出すことができるからです。

最後に、今後の桜樹会の一層の発展を祈るとともに、部に対するご協力をおねがいする次第です。

男子初優勝に寄せて

会長　稲橋恒行

男子のインカレ制覇が、日大体操部関係者にとって長年の夢でした。その夢が、今回多くの方々の努力によって実現したのです。

この日のために精進された選手諸君はもとより、浜田部長先生はじめ、監督、コーチ、そして部員ひとりひとりが努力を積まれてこそ、この快挙が成し遂げられたものと信じます。私達桜樹会といたしましても、微力ながら今回の優勝に貢献できたことを嬉しく思っております。

今は亡き秋葉先生の熱意で部が創設され、門脇前監督のもと、2部から1部へ、そして1部の上位へと着実に歩を進めてきました。しかしどうしても日体大、教育大の壁が破れず涙をのむ結果に終っていたわけですが、その間、個人総合では早田・椎名・五十嵐の三君が選手権をとり、学生体操界に日大ありと天下に示してきました。

そして遂に団体で勝ち、個人1・2・3位という快挙を達成したのです。

今や日大は、立派な伝統をもつ名門校に成長したといえるでしょう。しかし真の評価が得られるのは今後の発展にかかっていることも事実です。勝利至上主義は排さなければなりませんが、スポーツである以上、勝つための努力を怠ってはいけないと思います。

今後とも、日体大に互して新たな伝統を築かれますよう、関係諸先生方、そして部員の方々にお願いする次第です。桜樹会としましても、部の発展のため協力を惜しまない所存です。

インカレ優勝によせて

2年　梶山広司

8月21日夕暮れ時、駒沢公園体育館の日大応援席から史上二度目の紙テープ・紙吹雪が舞いました。昔の事はよく知りませんが、この2～3年、もうちょい、もう少しといわれて来た優勝の二字を、いま初めて掴まえる事ができました。誰もがよくやりました。この二字には大きな力があったのです。それを目指す私達の心の中に17年間蓄積された大きな何かが、発火点を得て一度に爆発した結果だと思います。

他の大学の者とよく話をします。「来年はどうだろう？」「来年の日大にはまだ勝てないよ」そう言いながらも奴らは思っているんですよ「俺達を甘く見るなよ」と。来年も勝たなければいけませんね。一年に一度の一番燃える事のできるインカレで。日本大学の体操の流れをもっともっと大きなものにして行くために。

インカレの感想

3年　寺元良人

今年の全日本インカレは7月19～22日まで行なわれ、今までに数々の試合に出場して来ましたが、これほど興奮した試合、それに応援合戦は始めて経験しました。

東日本インカレでも少差で敗れ、もう少しもう少しと思いながら、結局、諸先輩方の時代からの目標であった団体優勝、また打倒日体大の念願を果すことはできませんでした。

東日本ではあれだけやったのだ、こんどは必ずと思い、その気持をもって全日本までの間の練習にも、優勝だけを頭において、一日一日を大切にそして頑張ってきました。

自分自身、これだけやれば勝てると思っていましたので安心感はありましたが、そこは勝負、やって見なければわかりません。でも試合当日、失敗はあっても全員でよくそれをカバーし、良いムードで戦うことができました。

初優勝、本当に一生忘れることのできない思い出をのこすことができました。

最後に諸先生、諸先輩のご援助、ご声援、ほんとうにありがとうございました。

××××　　×××××　　××××

インカレ出場に際しての感想

3年　錦井利臣

日大ファイトデース！　オー！　応援合戦に始まり、応援合戦に終った。その中に先輩方から受け継いだ「打倒日体！」という言葉を心にいだき、1日1日が戦いだった。疲れ切った体にムチ打って……。でも、それ以上に苦しい思いをしたのは遠藤先生はじめ、早田先生、学生コーチだろう。その甲斐あってのインカレ初優勝！諸先生、諸先輩1人1人にありがとうございましたと言ってまわりたい気持です。また、僕自身にとっても、日大にもたらした優勝という言葉は、一生忘れられない。やったんだという充実感として残るでしょう。これからも一層の努力を重ねるつもりです。応援してください。

インカレ

3年　西巻洋一

インカレの感想といえば、勝った事はもちろんだが、苦しい練習のことが想い出される。試合を経験した人ならわかると思うが、練習中、自分で一生懸命やっているのに、どうしても思い通りに体が動いてくれない。その心境ほどいやなものはない。他の人に迷惑をかけてはいけないと思いながらも、ふてくされてしまい、結局迷惑をかけてしまう。今回も大分みんなに迷惑をかけてしまった。

優勝した事はもちろんうれしい。

いま全日本の強化練習をやっているが、遠くから見ていて、もし自分が入っていたら、またみんなに迷惑を……と思う現在である。

インカレを顧みて

3年　川野耕二

今年の7月19～22日、インカレが行なわれ、団体総合で男子優勝、女子2位であった。男子はこれまでの最高が2位で、優勝することができませんでした。しかし今年ついに、念願の初優勝を勝ちとることができ、本当に嬉しいというほかはありません。

私はチームの1人として、他の5人と力を合わせてやってきました。インカレまでに色々な

事がありました。毎日強化練習で、皆んな夏の暑い最中に汗を流し、苦しい時にはお互いに声を出し合い、技のことでは意見の合わないことも、数えきれないほどありました。でもこうして後になって振り返ってみると、本当に楽しくまた懐しく思われます。つき添ってくださいました、遠藤先生、早田先生にもお礼を申し上げます。そしてその他の諸先輩、応援して下さったＯＢ、現役の皆様ありがとうございました。

この全日本インカレ優勝は、私の学生時代のよき想い出として、生涯私の胸の中に残ると思います。

インカレに参加して

3年　野原秀安

インカレ前、個人でもいいから試合に出たいと思っていた。それがチームで出られることになってうれしかった。

試合が始まってからは、少しでもチーム得点にプラスになるように、自分なりに頑張った。そして初優勝したとき、日大で体操をやっていて本当によかったと思う。またあの時のような感激は二度とないと思う。

インカレ観戦のときの感激

（一年生一同）

試合を見たのは２１・２２日だけで、それも補助役員になっていたので全部は見られませんでした。２１日の１部の団体戦は忘れることが出来ないでしょう。１種目終わる度に点数がわかってくるので、補助役員の事はあとにして一生懸命応援した。（浦田　明範）

優勝が近づくにつれて、選手がやっているのではなくて、まるでぼくがやっているような緊張の連続でした。（金山　直嗣）

この栄冠を手の内にするまでに、いろんな人がどれだけの苦労を積み重ねて来たことでしょう。早田先生も遠藤先生も、他の体操関係の諸先生方も苦労しました。自分が大学に入学してたった３ヶ月足らずでこの喜びを味わえたのは、大変に運が良かったと思います。

（佐藤　之俊）

だが日本大学は勝った。日体大などは目ではなかった。そして個人でも日大が１～３位までとり、日本大学は完全に勝ったのである。

（加藤　英夫）

我々１年生にとって鼻が高く、そして荷が重いこととなるが、我々１年生がそれを背負って、

優勝の持続と日大体操部を良くするように勤めたいと思います。　（久保田一行）

個人の方たちの試合は見ました。そこで感じたことは、やはり失敗してはならないということです。そして体操競技とは正確さが第一であるということです。　（神田孝一郎）

その夜合宿所で優勝のお祝いをあげた。選手たちの顔はうれし涙でうるんでいた。この選手たちの顔を見たとき、つぎの世代のぼくらが頑張らなければならないと思った。日大に入って来て本当に良かったと、この日こそ感じたことはない。　（内田　民雄）

優勝日本大学！とマイクが体育館をひびきわたると、胸がジーンと音を立ててどこからかこみ上げて来るものを感じました。

（大友　栄紀）

大学の試合を見るのが初めてだったので興味があった。日体と日大の応援が他の大学に比べてすばらしかったように思います。でも反省は、拍手で他の選手が演技中のため迷惑したように思ったが、やっぱり日大の選手が勝ってほしかったので、皆んな必死で応援した。

（山本　一晴）

演技はいつもながらスバラシイ、僕に合った技を見つけ出した喜び、なんとムダな動きをしている選手に疑問をいだいたこと、良かった演技は、日大に限らず拍手が出るくらい感動させられた。　（増田　均二）

チームの結集のすばらしさに改めて感激した。会場での熱気のこもった応援合戦や、それにもまして選手等の試合における心意気が、応援する者へまるで形あるもののごとく伝わって来る。寺元さん、錦井さん、西巻さん、川野さん、野原さん、梶山さんおめでとう、本当におめでとう。　（小貫　孝春）

私はこの競技会で補助役員として仕事をしていたので、演技は満足に見られなかったが、逆に試合の内部から競技会全体がよく理解できた。学生主体で作り上げられたと聞くこの試合では、文字どうり応援合戦がくり広げられ、私の今まで感じなかった愛校心が、自分の中からわき出てくるのが感じられた。　（和田　利一）

この優勝もなみたいていの努力ではなく、体操部全員の心からの応援、そして選手１人１人の力いっぱいの演技のたまものだと思います。やればやれるという事の実証かと思います。僕も今度から、このやればやれるという事を心において、すべての点に頑張って行こうと思う。

（橋口　幸弘）

体操競技というものは個人の競技である。しかし僕はこの試合を見て、体操も団体競技だと感じた。優勝した時のあのみんなの心からの拍手、競技中のみんなの声援、本当にすばらしかった。体操競技を始めてもう３年と３ヶ月になるが、一度もこういう感じを持ったことがなかった。だからいつも団体競技の良さというものを味わってみたいと思っていた。それを体操競技で味わったのである。　（竹井　一夫）

入賞しなかった選手の中にもすばらしい技をしたのがいた。しかしそれもちょっとしたミスのために入賞できなかった。またある選手はその日の悪コンディションの為に駄目だったかも

知れない。しかし失敗も実力のうちだという。強い選手というのは、いかなる条件においても通せるという前提の下にあるときく。またそう思う。強くなるためには、まず練習が第一だということもわかるが、なぜかもえない最近の自分である。（米須　進）

全日本インカレで感じた事は、やはり関東の方が関西の方より高度な技をよく使っているという事を1番に感じました。しかし規定では中京もなかなか強いなあと思いました。それからゆかと跳馬は日体が強いのですが、あん馬、平行棒、リングなど日大の方が強いなあと感じました。（湯原　清介）

僕はインカレの試合を見学して、毎日毎日の練習がいかに大切なものかということを知りました。僕にとって体操の色々な試合を見ることはこれで2回目です。でもこんなに感激したのもまた始めてです。（鈴木　正雄）

一番印象に残った事は、優勝したその瞬間、みんなで紙テープをインカレ選手へ投げ、歓迎した。その時自分が優勝したようで、とてもうれしかった。（松田　洋）

試合中のチームのふんいきの良かったこと、観客席のふんいきが乗っていたということも勝因の一つではないかと思います。選手達のムードと応援のムードが一つになり、一歩一歩勝利に近づいていったのではないかと思います。（村上　秀宣）

3日目、とても楽しみにして先輩の自由演技を見ようと思っていたのに、先輩達の演技が始まる前に食当で帰らされる事になった。もうくやしくてたまらなかった。みんなが帰ってから試合の様子などを聞くとよけいにくやしくなり、もうどうにもできなかった。（千田　修平）

日本大学は初の優勝の栄冠をにぎり、皆んな大喜びをし、私はこの時たった3ヶ月の間でこの喜びを感じた。先輩などは10何年間味わっていないのに、私達1年生はたった3ヶ月足らずでこの喜びを感じたのである。この試合が始まって17年間1度も優勝の栄冠をにぎらなかった、日大の体操部の先輩の努力を無にしないように、これをきっかけに私達1年生は大事にしなくてはいけないと感じました。

（池田　勝吉）

僕は中学・高校と体操をやって来て、あんなに大声で応援し合うというのは初めてだった。場内アナウンスをなかば無視した形で行なわれる応援。体操をやっている人なら演技中にあんな大声で応援すると他の人の迷惑になる。そんな事ぐらいわかっていてもだまってはいられない。だれもがそんな気持ちだったにちがいない。反面、相手校の選手の失敗に拍手をするということがあった。これは体操選手にはあるまじきはずかしい事ではないだろうか。すばらしい演技を見て大声で応援しても、人の失敗に拍手をするというような応援は絶対にやめるべきではないだろうか。（坂口　孝）

日体大と4点ほどはなして優勝したことは、いままでの練習のたまものだと思います。

（平良　洋）

僕は本部記録をやっていたので結果は最初にわかるので、何か知らないけれど複雑な気持ち

で落付かなかった。1種目終えて通算で5点のリード、2種目目で差が縮まり、あとは差が開かず縮まずでついに優勝！うれしかった。あまりのうれしさに泣き出した者もいた。あの強い梶山さんの目にもなみだがあった。

（田島　清貴）

初の優勝は当然とはいえうれしかった。なんとなく胸があつくなった。日大にきてあんなにうれしく、喜んだのは初めてだった。いままできつかったことがいっぺんに飛んでしまったようだ。レギュラーの方にほんの少しでもマッサージだの買物などの仕事をさせてもらってよかったと思った。

（黒崎　淑行）

でも日大が優勝した瞬間ほんとうに日大に入れてよかったと同時に何か込み上げるような感激を感じた。そしてこの感激をなんどでもあじわえるように僕もがんばろうと思う。

（浜本　正夫）

選手のみなさんどうもお疲れさんでした。私のほんとうの気持から、日大優勝バンザイ！

（皆川　哲道）

「恒例国体懇親会」

第28回国体が千葉県下で開催された。体操は首都圏船橋市体育館が会場である。例年のごとく北から南から会員がやってきた。役員として、選手として。

久しぶりの首都圏国体ということで、例年国体時に催される懇親会も盛大になることが予想された。

10月16日午後7時、国鉄船橋駅前、モリウチビル5階の割烹〝とみせい〟。予約席は40である。試合がすんで会場から直接やってきた役員、選手の人達、勤めを終えて駆けつけた在京会員などで席はたちまち埋ってしまう。幹事は追加に次ぐ追加で落ち着く暇もない。

宴たけなわとなる頃、かなり広い〝とみせい〟の座敷も日大一色となってしまった。その数70余名。

第1回卒から第14回卒までの会員、それに現役の諸君も加えて、実によく揃ったものである。

自己紹介あり歌あり、そして夏に輝ける初優勝を飾ったイメカレ男子メンバーの紹介などがあり、恒例の国体懇親会の夜は更けたのである。

出　席　者

顧　問　門脇　春男　　遠藤　幸雄

第1回卒　稲橋　恒行　　石井　征也

第2回卒　吉川　　輝

第3回卒　工藤　道弘　　斉藤　正弘

藤谷弘一　三田　久　米田賢一

第４回卒　上野　剛　菊地君男　木村多喜

佐藤　誠　高田信興　田野　哲

早田卓次

第５回卒　小松武雄　志賀正昌　波多野伸

第６回卒　鶴見興人

第７回卒　海谷美代子　苅込和男

第８回卒　伊藤　勇　岩田　惇　小柴守夫

近藤盛一　橋口泰武　船木政明

山内　悟

第９回卒　朝倉徳雄

第１０回卒　飯島好美　門脇　隆　近藤　明

第１１回卒　宇野正信　大塚文雄　原　弘吉

第１２回卒　稲谷清子　斉藤多美子

第１３回卒　椎名　昇　椎名喜美子　庄司忠男

塚田和茂　辻　誌朗　寺西千津代

中谷秀明　中村栄喜

第１４回卒　五十嵐健夫　田中章二　外山宜男

中島　孝

現　　役　　２１　名

第９回女子欧州選手権をみて

今　村　　悟

（昭和４３年体育学科卒
西独Deutsche Turnschule在学）

１９７３年第９回女子欧州体操競技選手権大会は、１０月２６日、２７日の両日 London で行なわれた。

私はこの大会を視察するため、２６日早朝フランクフルト空港を発った。１０月１１月のロンドンには名物の霧が発生する。この日も飛行機は３時間の遅れを出した。（通常１時間半で行ける。）ロンドンに着いた私は、かねてドイツ体操連盟を通じて入場券の手配をしてあったので直接会場のWembley Stadium（ウエンブリィー・スタジアム）に行った。

私は、夏７月下旬から８月上旬にかけて約１０日間、ドイツ・プファルツ地方（ワインで有名な所で、フランス国境に近い。）の青少年と一緒にバスでドーバー海峡を渡り、イギリス各地を訪問していたので、今回は一人ではあったが、英語を話せないながら、経験を生かして、大汗をかき、恥をかきながらも何んとか遂行することができた。

会場のウエンブリィー・スタジアムは、ロンドン郊外、市の中心から地下鉄で４５分の所にあり、周囲は住宅地で、下町の感じであった。

会場では８㎜フイルムと、ゆかの曲を録音し、女子体操界のトップレベルの演技をつぶさにみ

た。試合は２６日（金）個人選手権、２７日（土）種目別選手権が行なわれたが、ソ連のL.Touristchva（ツリシチェーワ）選手が、この大会２連勝と共に、大会史上３人目（Latynina,Caslavska）の完全優勝（跳馬は東独ヘルマンと同点優勝）という偉業を達成して幕は降りた。

欧州選手権は２年毎に行なわれ、自由演技のみ実施される。今回は各国２名、２３ヶ国４２名の選手が参加した。会場は１万人以上収容する大ホールで、両日とも満員となり、特に女子生徒が圧倒的に多く、ツリシチェーワ、Korbut（コルブート）に人気が集中し、彼女達が演技台に上がるだけで大歓声をあげ床を踏みならし、他の選手がかわいそうであった。

ミュンヘン・オリンピック後、最も注目された大会ではあったが、ヴルナ（ブルガリア）世界選手権の前哨戦となったこの大会は、各国とも偵察をかね、また７４年より新規則が採用されるため、少々盛り上りを欠いた感じであった。

各国とも若手を起用し、下は１４才から、上は２３才迄、大部分が１６才前後でしめられていた。

では注目され、また上位をしめた選手と国について。

まず完全優勝のツリシチェーワ。オリンピック後初の大きな大会の出場であり注目されたが、演技内容はほとんど変らなかった。しかし円熟味が増し、安定した演技はさすがだった。特に跳馬での成長がはっきりうかがわれ、前転とび１回ひねりと塚原とびをマスターし、なかでも塚原とびは、後半局面での高さがあり、屈身で行なうのは時間の問題であろう。

コルブート。ユニバーシァードに優勝した彼女は問題視されている技を入れるかどうか注目されたが、オリンピック時と全く同じ演技内容であった。今回は大会前から足首を痛めていたため、平均台上での宙返りは後転とびに変っていた程度である。しかし平均台とゆかでのミスが目立ち、全体的に技に切れ味がなかった。また２７日の種目別選手権では、跳馬で助走しながら跳ばず、全種目棄権するというハプニングがあり、観衆は騒然となった。しかし今回はミュンヘンオリンピックのような同情が集らず、しかもヨーロッパ各地にテレビ放送されていたため、彼女の泣顔がミュンヘンと同じように写ったわけであるが、非難の声が会場でも相当あったし、ドイツに帰ってからも同様の声を聞いた。

次に東独の２選手について。個人総合第３位のK.Gerschau（ゲルシャウ）は、ヤンツ、ツホルトが引退した後、Helmann（ヘルマン）と共に新しい東独のエースになった感じである。彼女は１６才で、この大会中最も注目された選手である。跳馬、平行棒では抜群の切れ味をもっていた。しかし平均台、ゆかでの演技をみると、ヤンツのように演技を1回1回キメるので、７４年より新しい採点規則が採用されると、今後どのような得点が出るか非常に興味深い。

一方、オリンピック個人６位のヘルマンは、相変らず平行棒、跳馬はすばらしかった。今回

は平均台でミスしたため、個人5位に甘んじたが、ソ連の選手とは対等に戦える力を持っている1人である。跳馬での前転とび1回ひねりは減点箇所が全くなくすばらしかった。平行棒での、後方浮支持回転（ともえ）から後方宙返りを楽々こなし、種目別では最高の9.70を得点した。

次にルーマニアの2選手がすばらしかった。特にA.Goreac（ゴルリャチ）選手は個人で4位となり、種目別でも平行棒3位、平均台2位、ゆか3位とメダルをとり、東独のゲルシャウと共にこの大会注目された選手である。ミュンヘン・オリンピックで団体6位のルーマニアは、ワルナ世界選手権では団体、個人とも上位入賞の可能性が感じられた。

ハンガリーは、オリンピック個人9位のエース、I.Bekesi（ベケシー）が欠場したが、出場した2選手もすばらしく、オリンピック平均台4位のM.Csaszar（チェザスチャール）の平行棒と平均台が光っていた。オリンピック団体3位の力をはっきり示し、層の厚さをみた思いである。

西独のエースU.Schohm（ショーン）は個人6位に入り、ワルナ世界選手権では、ドイツと日本ははげしい順位争いが予想される。

以上が主だった選手と国を挙げてみたのであるが、次に技をみてみよう。

今回の大会は前述した通り、少し盛り上がりを欠いたものであったが、それが技にも表われ、ほとんど新技はみられなかった。

では跳馬から。個人上位入賞者、種目別出場者のほとんどが、前転とび1回ひねりをこなし、塚原とびは、ルーマニアのゴルリャチとツリシチェーワの2人だけであった。ツリシチェーワは、個人選手権で前転とび1回ひねりと塚原とび、種目別では塚原とびを行なったが、どちらもすばらしいものだった。大技2つをもっている彼女は正に女王の貫録がでてきた。

平行棒ではほとんど全員が、ひねり下りと宙返り系統の技で終っていたが、前述のヘルマン（東独）の後方浮支持回転（ともえ）から後方宙返り、また、ゴルリャチ（ルーマニア）の振り上げ倒立より後方宙返りが注目された程度で、ほとんど新技はなかった。

平均台では、ゲルシャウ（東独）が、開始技でいきなり開脚座を行なった程度である。

ゆかでは、ゲルシャウが連続後方伸身宙返りを行なった。2回ひねりは、ツリシチェーワとショーン（西独）の2人だけであった。

以上が大体の結果であるが、コルブートがけがでさえなかったためか、ツリシチェーワと他の選手に実力の差が感じられた。この大会は各国2名しか参加できないため、優秀な選手の多いソ連、東独の実力がどの程度のものか知ることはできなかった。

74年より大巾な規則改正があるため、各国とも若手を起用し、経験をつませた感じの大会であった。しかし私にとっては、初の外国での大きな試合をみることができ、非常に勉強になった。日本も若手の日大林田・矢部、日体大吉川・押田等台頭していると報告があったが、早く世界に通用する選手が育ってきてほしいもの

である。　（1973.11.）

個人総合

1位　ツリシチェーワ　（ソ　連）38.10
2位　コルブート　（　〃　）37.65
3位　ゲルシャウ　（東　独）37.40
4位　ゴルリャチ　（ルーマニア）37.30
5位　ヘルマン　（東　独）37.20
6位　ショーン　（西　独）36.90

跳　馬

1位　ツリシチェーワ　（ソ　連）18.85
1位　ヘルマン　（東　独）18.85
3位　ショーン　（西　独）18.70

平均台

1位　ツリシチェーワ　（ソ　連）19.10
2位　ゴルリャチ　（ルーマニア）18.85
3位　グリゴラス　（ルーマニア）18.75

平行棒

1位　ツリシチェーワ　（ソ　連）19.30
2位　ヘルマン　（東　独）19.25
3位　ゴルリャチ　（ルーマニア）18.95

ゆ　か

1位　ツリシチェーワ　（ソ　連）18.90
2位　ゲルシャウ　（東　独）18.80
3位　ゴルリャチ　（ルーマニア）18.75

※　名前を独語読みにしているので多少違うかもしれない。

〔訂　正〕

9号の「ドイツ体操学校に入学して」の記事の中で、ドイツ国立体操学校は1961年創立とあるのは、1959年創立のあやまりです。訂正します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊　　行　　事　　＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

第10回　忘年会

48. 12. 1～2　湯河原温泉　梅屋ホテル

参加者　稲橋　恒行　岩田　惇
芳尾　明　朝倉　徳雄
菊地　君男　高波　司雄
小松　武雄　綱島　路正
鶴見　興人
岩沢　稔

×××××××××××××××××××
×　　×
×　第4回スキースクール　×
×　　×
×××××××××××××××××××

期　日　1月3日～5日
場　所　志賀高原
宿　舎　西発哺温泉ホテル

参加者　平川　文雄　菊地　君男
早田　卓次　小栗　郁郎
小松　武雄　鶴見　興人
船木　政明　朝倉　徳雄
井上　靖　門脇　隆
相原　和明

桜樹会ゴルフコンペ成績

第5回　48.6.21 戸田カントリー（埼玉）

NAME	OUT	IN	GROSS	HDCP	NET	RANK
稲橋	53	52	105	20	85	7
岩本	60	65	125	36	89	10
鶴見	52	52	104	27	77	3
山中	34	43	77	3	74	2
吉川	53	48	101	17	84	6
工藤	53	66	119	32	87	9
堀田	63	59	122	36	86	8
菊地	44	44	88	17	71	1
朝倉	49	59	108	26	82	5
石井	55	62	117	36	81	4

優勝	菊地　君男		
準優勝	山中　勝男		
第3位	鶴見　興人		
B．G	山中	B．B	工藤
D．C	山中	N．P	石井

第6回　48.8.30　総成カントリー（千葉）

NAME	OUT	IN	OUT	GROSS	HDCP	NET	RANK
高田	48	48	51	147	22.5	124.5	8
山中	40	36	40	116	3	113	2
朝倉	56	52	48	156	39	117	5
岩田	70	65	71	206	54	152	12
※阿部	53	47	51	151	13.5	137.5	10
津村	50	44	42	136	27	109	1
岩本	67	69	68	204	54	150	11
橋口	57	57	54	168	54	114	4
菊地	45	45	50	140	19.5	120.5	7
鶴見	52	48	49	149	36	113	3
堀田	61	59	53	173	54	119	6
※川島	56	66	59	181	54	127	9

（※印　会員外参加者）

優勝	津村　二郎		
準優勝	山中　勝男		
第3位	鶴見　興人		
B．G	山中	B．B	岩本
D．C	岩本	N．P	鶴見

第7回　48.11.13　　座間米軍キャンプ内ゴルフ場

NAME	OUT	IN	OUT	GROSS	HDCP	NET	RANK
門脇	50	51		101	24	77	1
津村	50	47		97	12	85	6
※山崎	46	46		92	12	80	5
※秋山	73	69		142	36	108	10
高田	48	47		95	15	80	3
※角田	49	46		95	15	80	4
※村田	66	58		124	36	98	9
鶴見	58	52		110	22	88	7
岩本	56	57		113	36	77	2
※坂入	56	56		112	20	92	8

（※印は会員外参加者）

優　勝　門脇　春男
準優勝　岩本　忠喜
第3位　高田　信興
B．G　山崎※　　B．B　村田※
D．C　高田　津村
N．P　坂入※　津村

第8回　49.1.30　　GMG八王子ゴルフ場（東京）

NAME	OUT	IN	OUT	GROSS	HDCP	NET	RANK
山中	44	42	46	132	3	129	6
門脇	48	51	47	146	27	119	3
岩本	67	72	75	214	46	168	14
津村	45	48	50	143	21	122	5
※阿部	54	55	53	162	13.5	148.5	12
工藤	62	53	74	189	48	141	11
早田	48	45	45	138	42	96	1
吉川	50	57	52	159	25.5	133.5	8
鶴見	54	51	59	164	33	131	7
平川	75	66	66	205	54	151	13
堀田	57	72	67	193	54	139	10
橋口	55	55	60	170	54	116	2
岩田	55	56	71	192	54	138	9
菊地	46	46	48	140	19.5	120.5	4
早乙女	77	78	67	222	54	168	15

（※印は会員外参加者）

優　勝　早田　卓次
準優勝　橋口　泰武
第3位　門脇　春男
B．G　山中　　B．B　岩本
D．C　山中　津村　津村
N．P　山中　吉川　菊地
大波賞　工藤
最多OB賞　工藤　（12）
珍プレー賞　岩田
モーニング賞　津村

会費領収について

48年5月27日以降、49年2月16日現在までの納入状況

現金にて

48. 6.13	相原和明	1,000
7.21	福田竹子	1,000
〃	稗田房子	1,000
〃	津村二郎	1,000
〃	高田信興	4,000
〃	飯島好美	2,000
〃	箱根　修	2,000
〃	渡部宣裕	4,000
〃	中野憲明	2,000
〃	斉藤敬一	1,000
〃	椎名　昇	1,000
〃	赤嶺芳弘	1,000
〃	戸沢　滋	1,000
〃	中島　孝	1,000
〃	渡部正行	1,000
7.23	上野　剛	1,000
〃	椎野芳挙	1,000
8.11	山田隆士	2,000
12	仲西盛光	2,000
15	梅本文子	1,000
24	川口　潔	1,000
〃	井上　靖	3,000

総務

48. 9.21	木下咲夫	1,000
〃	宇野正信	1,000
〃	三田　久	1,000
〃	稲谷清子	2,000
〃	小柴守夫	1,000
〃	近藤盛一	2,000
〃	中村栄喜	1,000
10.16	志賀正昌	3,000
49. 2. 2	常井晴道	4,000

口座にて

48. 7. 4	宇佐美典久	1,000
7. 7	安藤泰行	1,000
〃	金子正史	1,000
〃	上野　剛	1,000
〃	門脇　隆	1,000
7. 9	阿部　稔	1,000
7.10	櫛谷宗敬	1,000
〃	佐藤　勲	1,000
7.11	近藤　明	1,000
〃	田野　哲	1,000
〃	河原正昭	1,000
〃	佐藤　均	1,000
〃	高波司雄	1,000
〃	浅田泰男	1,000
〃	湊　満雄	1,000

48.	7.12	神崎悦子	1,000
	7.21	武田和子	1,000
	〃	伊藤寛美	1,000
	〃	徳永富夫	1,000
	7.13	石丸　洋	1,000
	〃	諸岡嘉春	1,000
	〃	藤谷弘一	1,000
	〃	小俣里知子	1,000
	〃	伊谷正一	1,000
	〃	中谷秀明	1,000
	7.14	川口幸彦	1,000
	7.16	山内　悟	1,000
	7.18	島崎康行	1,000
	〃	安田和明	1,000
	〃	岡本公子	1,000
	〃	石毛　誠	1,000
	〃	船木政明	1,000
	7.19	松田　明	1,000
	7.21	過足重六	1,000
	〃	塚田和茂	1,000
	〃	岩沢　稔	1,000
	〃	伊東恭一	2,000
	〃	中馬盛夫	1,000
	7.25	小笠原祥子	1,000
48.	7.25	佐藤　誠	1,000
	〃	古賀和彦	1,000
	7.26	赤上もと子	1,000
	7.28	山村英子	1,000
	〃	早川尚夫	1,000
	〃	森山　理	1,000
	8. 1	若林みどり	1,000
	8. 4	小栗郁郎	1,000
	〃	山口次男	1,000
	8. 8	松本恭子	1,000
	〃	若尾　明	1,000
	8. 9	山崎忠男	1,000
	8.10	平野昌宏	1,000
	8.13	宮川早苗	1,000
	8.16	松岡範孝	1,000
	8.21	舟山忠広	1,000
	8.28	石井悦夫	1,000
	8.31	保坂弘一	1,000
	9.26	池田成子	1,000
	10. 3	辻　健一	1,000
	11. 1	川口　亨	1,000
	11.24	浦辺由子	1,000
	12.20	酒井博行	1,000

お　知　ら　せ

昭和４８年度会員総会について

下記により本年度会員総会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえ、ぜひご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時　昭和４９年３月１７日（日）
　　午後１時より
場所　日本体育協会　３０１号室
　　（原宿駅下車）

※　総会終了後、例年通り懇親会を行ないます。（会費　５００円）

※　同封の返信用はがきは３月１０日までにご投函下さい。

編　集　後　記

いつものことながら、試験間近かになってあわてふためく学生のように、今回もまた、総会を１ケ月後に控えてあわただしい編集であった。

昨年は男子チームがインカレでの初優勝を飾り、会報第１０号はその特集記事を満載するはずであった。先輩各位からの感想などもお聞きしたかったのであるが、結果は現役諸君のものが中心となってしまった。紙面の都合上、１年生部員の文章は、編集部海谷の責任において要約するという形をとった。しかし短かい文章の中に、新鮮なおどろきと感激が実によく表現されていると思われる。

入学後間もなく、このような経験を得たことが、必らず今後の部生活にプラスとなろう。本号は会員のみならずなるべく多くの部員諸君にもぜひ読んでほしいものである。